

園番号 807

令和6年度 奈良市立都南保育園 研究実践概要

園長名 堅尾 清子
全園児数 48名

1. 研究主題 『やってみよう、おもしろい、もっとやってみよう』
～主体的・意欲的に遊ぶ子どもをめざして～

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

子ども達は、園庭や室内で好きな遊びやしたい遊びを見つけて楽しむ姿があるが、すぐに飽き、保育者が一緒にないと遊びが続かないという姿があった。繰り返し遊び、遊び込むという姿にはまだつながっていない。子ども達が自ら『やってみよう、おもしろい、もっとやってみよう』と感じ継続して遊びを楽しむ環境を構成するために引き続きこの主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・豊かな環境の中で『やってみよう、おもしろい、もっとやってみよう』と主体的・意欲的に遊ぶ子どもを育てる。

②研究の重点

- ・0歳児から5歳児までの発達を理解し、乳幼児期へのつながりのある保育をすすめる。
- ・職員間で連携をとりながら、子どもが主体的・意欲的に活動できる環境や援助のあり方を工夫する。

③活動の方法

年度初めに、各クラスの子どもの姿や課題を出し合い今年度の研究主題について話し合った。学期ごとに環境について話し合う会議を数回設定し、子どもの遊ぶ姿から、園庭環境や保育室環境について見直し、主体的・意欲的に遊ぶことが出来るよう再構成したり、子どもの心の動きを多面的に捉え、振り返る場を持った。

0歳児「これなんだろう？」(9月)

子ども達が午睡の間にカード落としの手作り玩具を部屋の一角に用意した。箱の溝に少し押したらカードが落ちるように半分見えるようにカードを差しておいた。午睡起き、A児が見慣れない箱を見つけた。近づいていき箱をじっと見ている。溝にささっていた絵カードを見つけ、手に取り口に入れてみる。保育者がカードを箱の溝にポトンと落としてみせた。不思議そうに箱を見つめ、中をのぞいてみたり、手をいれてみたりする。カードを溝に入れようとするがなかなか入らない。縦にしたり、横にしたり、力ずくで入れようとしている。保育者も一緒に手を添えるとカードが落ちた。少し驚きながらも保育者と目を合わせニコッと笑った。その後も繰り返しカードを落とすことを楽しんでた。

<評価・反省>

子ども達が壁の隙間に物を落とすことを楽しんでいる姿からカード落としの手作り玩具を用意した。初めて見る玩具に不思議そうに触ったりのぞいたりしている姿から子ども達が興味を持っている気持ちが伝わってきた。その後もカードの絵を指さし保育者と目を合わせたり、カードを穴に落としたりの遊びを楽しんでいる。これからも子ども達の姿から興味や関心を引き出せる環境を用意していきたいと思う。



1歳児「どんぐり転がしおもしろいな」(10月)

秋になり、園庭にクヌギのどんぐりがたくさん落ちていた。ある日A児が落ちているどんぐりを手に取り、「これ」と言って不思議そうに見ていた。「どんぐりって言うよ」と言うと「どんぎゅり」と言って両手いっぱい拾っていた。数日後、部屋を出てすぐの場所に子どもや保育者が拾って集めたどんぐりをかごに入れておいた。そのすぐ横に転がし遊びが出来るようにペットボトルのトイの台を作り用意しておいた。A児が靴を履いてすぐにみつけて「せんせい。あ・あ・あ・」と台を指さして保育者に教えてくれた。

左手にどんぐりを握りしめ、三段目のトイにどんぐりを置いた。勢いよく転がる様子を一生懸命目で追い、地面にどんぐりが落ちると「いったね」とつぶやいていた。その後も2,3回続けて転がしていた。「ここからも転がせるよ」と1段目のトイを指さすと1段目にどんぐりを置きさっきよりも長く転がる様子をずっと目で追っていた。♪どんぐり、どんぐりこーろこーろ♪と歌うとA児も一緒に歌いながらどんぐり転がしを楽しんでいた。

<評価・反省>



園庭に大量のどんぐりが落ちていて自然に興味を持ったA児。毎日どんぐりを拾って集めることを楽しんでいる姿があった。もっとどんぐりの遊びを楽しめたらと思いどんぐり転がしの環境を用意した。部屋の目の前に用意したことで子ども達がすぐ気づき、興味を持って遊ぶことが出来た。これからも様々な遊びを用意し、子ども達の発想やつぶやきを受け止め環境を構成していきたいと思う。

2歳児「どんぐりちょうだい」(10月)

園庭にたくさんのどんぐりが転がっていた。A児が「先生、ママごとしたい。」と言って、砂場へかけて行き、お鍋とおたまを取り出した。A児が次に、「先生、コンロほしい。」と言い、保育者がケースを逆さにして渡すと、それを見ていたB児が「私も！」と言い、A児と少し間を開けて、ケースのコンロを使って遊び始めた。



A児とB児がそれぞれのコンロの上で料理を作り始めた時、A児が「どんぐりほしい！」と言ってクラスの部屋の前にある牛乳パックの虫かごを取り出し、どんぐりの木の下へ走って行った。

長い間A児が戻って来なかったもので、“もうママごと遊びは終わりかな”と保育者が思っていたところ、虫かごにこぼれるほどいっぱいにどんぐりを集めてA児が走って戻ってきた。A児が自分の用意した鍋にどんぐりを入れた。それを見ていたB児が「どんぐりちょうだい。」と話しかけると、A児が片手いっぱいにどんぐりをつかんでB児のバケツに入れました。「ありがとう。」と言って嬉しそうな表情のB児。次に、A児が「水ほしい！」と言った。保育士が「少し待っていてね。」と言って2個のバケツに水を入れ、A児、B児にそれぞれに渡した。A児、B児が鍋に水とどんぐり・砂を入れて、それぞれコンロの上で料理を作った。保育者がA児に「何作っているの？」と聞くと、「どんぐりごはん。」と言って、お玉でどんぐりをすくったり、かきまぜたりして遊んでいた。B児に聞くと「カレー」と言って、鍋から水をこぼさないようにフライ返しでどんぐりを転がしていた。

<評価・反省>

お家の人がしている料理の場面を思い出し、子ども達なりにイメージし遊びを楽しむことが出来た。B児がA児の真似をして遊ぶ姿、2人が簡単な言葉のやり取りをして遊びを進めていく姿は2歳児らしい姿だったと思う。また、子ども達が「コンロほしい」「水ほしい」等言葉で思いを伝えてくれたことで子ども達の思いを実現していくことが出来た。これからも子ども達の声に耳を傾けながら必要な環境を用意し、様々な遊びを楽しんでいきたいと思う。



3歳児「たのしかったね またしよね」(7月)

クラス全体で小麦粉粘土の遊びをした。一人一人が十分遊べるように一人に一つずつボウルを用意した。この日はボウルに入っている小麦粉を触り、「きもちいいね」と言って腕や顔につけて粉の感触をそれぞれ確かめていた。水を少し入れ、手で混ぜていたが嫌な顔をして「べたべた」と言うので「小麦粉入れてみる？」と聞くとうなずいたので粉を入れてまた手で混ぜていた。保育者も少し手伝うとだんだん固くなっていき、形になると机の上で押したりたたいたりして「せんせいピザできたよ」と皿にのせて見せてくれたりした。

次の週。子ども達の声や様子から絵の具やおかずカップを用意した。一人一人のボウルに様々な色の絵の具をスプーンで入れながらかき混ぜることを楽しんでいた。突然A児がままごとコーナーに行き、レンジにボウルごと入れようとした。しかしボウルが大きくてレンジには入らなかった。すると、今度はレンジを机に持っていきおかずカップにドロツとした粘土を入れ、レンジに入れてボタンを押した。「ピーピーピー」と言って取り出し、また入れてという遊びを繰り返し楽しんでいた。まるでクッキー作りをしているかのようだった。

<評価・反省>

様々な遊びを楽しんで欲しいと思い、春から保育者自ら楽しんだり、声かけを工夫したりしてきた。この日も粉から固まっていく様子をみんなで楽しんで、より興味を示すことにつながったと感じる。楽しかった経験を覚えていて翌週の遊びの時も興味を持って取り組んでくれた。レンジへの遊びに発展した時もイメージして遊んでいることが分かったのでその遊びを見守った。見守ったことで今日の遊びも楽しい経験になったように思う。これからも引き続き子ども達の発想を受け止めたり、子ども達の声の聞いたりしながら様々な遊びを楽しんでいきたいと思う。



4歳児「ドングリコーヒーてんです！」(12月)



雨に打たれてふやけたドングリを見つけた A 児が S 棒でドングリを潰していた。「なにしてるん？」と B 児がのぞき込むと「コーヒーつくるねん。ドングリはまめっばいから。」と潰したドングリをコップに入れながら A 児が答えた。そして、「これは『きかんげんてい』のコーヒーやねん。いまだけやで。」と言いながら、水を入れに水道に行き、戻り際にイチョウの葉を拾ってコップに入れた。

その様子を見ていた C 児が「すいませーん。バイクはどこにとめたらいいですか？」とキックボードを押しながら近づいてきた。B 児が「じゃあ、ここをちゅうしゃじょう

にするわ。しゅうりします。」とぼっくりのかかっているハンガーラックを持ってきて、キックボードのタイヤのチェックを始めた。キックボードを預けた C 児は A 児にコーヒーを出してもらって、B 児が修理しているのを眺めていた。

「ここはなにやさん？」と保育者が声をかけると「ドングリコーヒーてんやで！」と A 児が教えてくれた。その声に「きかんげんていやで。」

「キックボードのしゅうりもしてくれるんやで。」と B 児と C 児が口々に言い、「すごいいみせやねんで！」と3人で笑い合っていた。その後、修理の終わったキックボードに乗って C 児は遊びに行き、B 児は「いらっしやいませー！コーヒーありますよー！」と呼び込みをしに走っていった。

<評価・反省>

いつも園庭にあったドングリが水にぬれていたことで始まった遊びであった。自分の感じたことを友達に言葉で伝えたり、イメージを共有したりしながら遊びが進んでいく姿に子ども達の成長を感じることが出来た。自分の遊びだけでなく友達の遊びにも関心を持ち説明している姿にも友達関係の深まりを感じた。友達の思いを受け入れることで自分が想像していない方向へ遊びが発展する経験を重ね、友達とのつながりを深めていって欲しい。



5 歳児「ここからなげよう！」(12 月)

園庭でサーキットのコースを友達と作って遊んでいた。その中の一つタイヤの穴にボールが入ったら次に進むコースを考え楽しむ姿があった。しばらくすると長椅子の上にタイヤをのせて、タイヤをねらって一人の子がボールを投げた。すると、それを見ていた子達が数人集まってきて並んで順番に投げはじめた。タイヤの真ん中に入ると、「やったー！」と喜びあっていた。その声を聞いて違う遊びをしていた子ども達もやってきて一緒に遊び始めた。



園庭のタイヤを転がしながら集め、前後左右に並べ遊びが広がっていった。A児が「ここからなげよう」と足で土に線を引いていたが、「みえへんな～」と困っていた。B児が思いついたように階段下に向かうとC児もついていき、一緒にトイを運んできて線の上に置いた。「ここからなげん」とB児が言うと、他の子達は順番に並び、遊びが始まった。

様子を見ていたD児は、椅子の端に座り「お～おめでとう 100 てん！」「そこは 10 てん！」と拍手をし始めた。

B児は「ここにもおいたで！」と長椅子の向こうにタイヤを置き、投げる所からは見えないタイヤに入れるというアイデアを嬉しそうに伝えた。そしてコーンでついたてを作りながら子ども達は楽しそうに遊んでいた。ボールが入るとみんなで喜び、外れると「おいしい！」と悔しさを共感しながら遊んでいた。引き続きD児が「やった～おめでとう！ここは 1000 万！」「ここは 100 点！」と拍手を送り、どんぐりや、木の枝を探すことを楽しみ始めた。



4 歳児もやってきてトイの後ろに並んで見ていた。E児が「したいん？」と 4 歳児に声をかけた。F児も「ボールかしたるわ、ここからなげんねん」とボールを渡し、「順番にならびや」と教え、「そうそう！」と見守り 4 歳児も一緒に遊びを楽しんだ。

<評価・反省>

それぞれが経験してきた物事をイメージして役割をもって遊んでいた。

子どもの興味、関心をもとに、援助や環境構成を変化させる事で、子どもがやってみたいと思って遊ぶ姿につながった。友だちの考えを受け入れ共感しながら遊びを広げ、展開しながらすすめている姿に、友だちとの関係の深まりを感じた。また、自分達がおもしろいと思うことを嬉しそうに 4 歳児に伝え、優しく声をかけながら 4 歳児がやりたい気持ちを受け止め、一緒に遊びをすすめる姿に年長児としての成長を感じた。

発達をとらえながら、子どもの様子に合わせ、願いをもって保育者の援助や環境構成に反映させることで、子どもがおもしろい！楽しい！と主体的に遊び、継続する姿につながった。子どもが自分で考えて遊びこめるようにするためには遊びを肯定的に認めてもらう経験をたくさんすることが必要であると考えた。これからも子ども達の発想や楽しんでいく姿を認めていきたいと思う。

5. 研究の成果

定期的に会議を持ち、環境の見直しをしたりクラスの子どもの姿を出し合ったりする事で、環境を意識しながら保育することが出来た。また、各クラスの保育環境をみんなで見てまわり他のクラスから気づきやアドバイスをもらうことで自分の保育を多面的に振り返ることが出来たと思う。その中で子ども達がそれぞれの遊びを楽しみ、自ら遊びに向かう姿が育ってきている。

6. 今後の課題

『やってみよう、おもしろい、もっとやってみたい』と主体的・意欲的に遊ぶ子どもを目指し、環境を整え援助の仕方を工夫することで、意欲的に遊ぶ姿が育ってきている。次年度も引き続き年度当初に子どもの姿や課題を職員間で共通理解し、年間計画を立て定期的に振り返ると共に 0 歳児から 5 歳児までのつながりある保育環境づくりを目指していきたい。